

失われたネックレス イーシャ・サーデサイによる再話

何世紀も前のインドに、かなり裕福な女性が住んでいました。彼女は町の広場に面した2階建ての家を持っていて、よくあることですが、天気の良い日にはバルコニーのドアを開け放しにするのが好きでした。そうすれば、街で何か面白いことが起きている時にはすぐに知ることができたからです。

ある日、その女性が湯気と混ざり合うジャスミンオイルの香りを楽しみながらのんびり入浴していると、外から音が聞こえてきました。最初に太鼓の軽やかな音、次にフルートの高音のさえずり、そして複数の金管楽器が同時に演奏されているに違いない楽しい不協和音が聞こえました。それは最高に喜びあふれた音楽で、女性は、もっと聞きたい、何が起きているのか見に行きたいという衝動に駆られました。

彼女は浴槽から飛び出し、あちこちに飛び散る水を気にも留めず、タオルをひったくり、服を着ようと走りました。音楽はどんどん大きくなっていました——それは何かの行列が通り過ぎているように聞こえ、彼女はそれを見逃したくない、と願いました。彼女は衣装ダンスの優雅な木製の開き戸をぐいっと開け、最初に目にしたサリーをつかみ、急いでその絹布を自分の体に巻き付けました。最後のひだを中に折り込むと、彼女は鏡をちらりと見ました。髪はまだ濡れていて、毛先は勝手気ままにうねっていましたが、これで仕方がないと考え、彼女は外に出ました。

彼女は家を出ると、行列がほんの先までしか進んでいないことが分かり安堵(あんど)しました。すぐに群衆に加わり、それから1時間、ファンファーレやお祭り騒ぎを大いに楽しみながら通りを歌い踊りました。やがて彼女は数人の友人と一緒に家に帰り、みんなで笑いながら息を切らして長椅子に倒れ込みました。しばらく気だるい沈黙が続いた後、女性は起き上がりました。

彼女は首と胸を軽くたたき始めました。最初はゆっくりと、その後もっと必死に。彼女の目は大きく見開かれていました。

「どうしたの？」友人の一人が心配そうに尋ねました。「何か捜しているの？」

「ネックレスが！」と、彼女はパニックに陥った声で言いました。「私のダイヤモンドのネックレスが！ 行列に行く前は着けていたんだけど——なくなっちゃったの！」

「心配しないで」と、なだめるように友人が言いました。「捜すのを手伝いましょう。もしかしたら家のどこかにあるかもしれないでしょう？」

「いいえ、間違いなく出掛ける前に着けていたはずよ！」と、女性は金切り声を上げました。それでもやはり、彼女は家具の後ろをのぞき込んだり、クッションやあれやこれやを持ち上げたりし始めました。彼女の友人たちも一緒になって捜しました。

しかし、彼女たちの努力は実を結びませんでした。女性はおびえた表情で友人たちの方を向きました。「もし——もし誰かがネックレスを盗んだとしたら？」

「行列の中でということ？」

「そう！」と、女性は言いました。「あれはとても高価なネックレスで、盗む機会はいくらでもあったでしょう。ああ、私のネックレスを持っている泥棒がいるに違いないわ！」

女性は再び長椅子に沈み込み、その新しい可能性に打ちのめされたようでした。彼女はすすり泣き始めました。

「とても美しかったの」と、彼女は不機嫌に言いました。「家宝なの。もし家族にそのことについて聞かれたら、何て言ったらいいのか分からない。ああ、私はあのネックレスが大好きだったの！ 毎日着けていたわ。そして今、誰かがそれを奪って行った——そのずぶとさ、信じられる？ それとも…それとも…それとも、ネックレスは踏みつぶされたのかもしれない！ そうよ、今思えば、そうだったに違いない。ほら、私、最初からずっと言っていたでしょ、この行列はあまりにも混沌(こんとん)としていて人が多過ぎるって——」

「それ、何？」突然、彼女の長舌を遮って友人の一人が言いました。

女性は鼻をすすりました。「何のこと？」

友人がつかつかと近づいて来ると、女性は困惑したように、「あなたは何を——」と言いかけてました。「もう確かめたのよ——あら！」

女性の喉元近くに、サリーのひだの下からちらりと見える金色に輝く何かがありました。友人はそっと引っ張り、のぞいているものをさらけ出しました——幾つかの白く丸いダイヤモンドをつなぎ合わせた繊細な鎖を。

「私のネックレス！」と、女性が小声をもらしました。「私のネックレス！」と、彼女は繰り返し、何が起きたのか気づくにつれて、その声はさらに大きくなり、興奮していきました。涙が再び彼女の顔を流れ落ち始めましたが、今度は涙の下で笑みを浮かべていました。

「それで、結局ネックレスはなくなってなんていなかったのね？」と、女性が気持ちを落ち着かせた後に、友人が冗談めかして言いました。

女性は柔らかな表情で答えました。

「ええ」と、彼女は言いました。「ええ、そうだったみたい。私はずっと持っていたのね」

これはインドのヴェーダーンタ哲学の中で語られた古典的な物語に発想を得たものです。



© 2024 SYDA Foundation®.著作権所有。